

声なき声

白百合学園高等学校 二年 小宮山 響

私はこの夏、学校主催のボランティア活動「ゆりごころ」に参加した。有志の生徒が東北の各地で様々なボランティア活動をするこのプログラムは、二〇一一年の東北震災の時から続いている。私は昨年も参加し、今年で二回目だった。高二的の夏は受験勉強真っ只中である。母からも「この夏が勝負だからね」と口うるさく言われている上に、夏休み中には修学旅行や部活の合宿、塾の夏期講習までぎっちり入り、ほとんど自由になる時間がない。ゆりごころは去年参加したし、東北は一回見てくればいいんじゃないという気持ちもあった。でもどこかから、行った方がいい、行かないと後悔するのはお前だぞ……という心の声が聞こえてくるのも確かだった。行きたいなあ、やっぱりもう一度東北へ行きたい。行きたいのはわかるけれど、時間がないでしょと何かが自分の心を押しとどめる。でも来年はもっと厳しい。行くなら今だ。私は心の会議を終わらせて先生に参加届を提出した。

新幹線やまびこで三時間。意外と東北は近いのだ。去年は熱風が吹き付けたホームも、今年は涼しい風が吹きぬけていく。去年とほぼ同じ行程が組まれているため、二回目の訪問となる場所も多かったのに、私には全てが新鮮に感じられた。音も景色もたった一年でこんなにも変わるのかと驚いた。山が切り崩されて新しい高台が造られ、その上には真新しい家が沢山並んでいる。ガガガッと響く工事音や船が動き出す時のぎぶぎぶという波音も聞こえてくる。一年前より音の種類も大きさもどんどん増えている気がした。確実に町が動き出している。ちよっとほっとして、ああ、やっぱり来てよかったと私はここで初めて思った。

しかし、震災当時から動きを止めている場所がある。私達は女川町にある大川小学校へ向かった。大川小学校は他の学校に比べて被災が大きく、ほとんどの生徒と教員が亡くなった学校としてニュースでも何度も取り上げられた。解体と保存の意見が渦巻く中で、生き残った子供達の意見も取り上げられて保存が決定した。何度見ても大川小は胸に堪えるものがあつた。

学校の周りは砂利で囲まれ、奥には森がある。学校の前にはひまわりの花が列をなして植えられている。のどかな景色のはずなのに、そこだけ空間が浮いているような感覚、静かな異様な空気が漂っていた。その空間に足を踏み入れた時、私の頭から色と音が消えた。友達の話し声も、砂利を踏む音も遠くなり、校舎の壁の赤い塗装も、鮮やかなひまわりの黄色も全てが灰色に見えた。異次元の世界は、こんなものかもしれない……。灰色の景色の中を静かに歩き、校舎の正面に体を向けた。こちら側の壁は既に無くなっていて、教室の中が見通せる。私は校舎をじっと見つめた。すると灰色の中に、少しずつ、ほんの少しずつ色が戻ってきた。同時に子供

達の声が聞こえてきたのだ。先生、おはよー！サッカーしようぜ！じゃあ、この問題分かる人！すごく楽しそうな声だった。目の前で子供達が遊び、勉強している姿が鮮明に見えてしまった。私の頭の中で描いたのではなく、本当にその場に子供達がいたのだ。わいわいがやがや、よくあるにぎやかな教室だった。

友達に肩をたたかれ、振り向くと、そこはやっぱりただの廃墟だった。子供達の声は消え、蟬の鳴き声だけが響いていた。自然と涙がこぼれ、止まらない。声が聞こえないってこういうことだったのか。ご遺族の方のお話が蘇り、胸もぎゅっとつかまれたように痛い。子供を失った方々、もう抱きしめることも出来なくなった方々の気持ちがあつたなんて、とても言えないけれど、ほんの少しだけ気持ちを感じられたのかもしれない。子供達の楽しい声であふれていたはずのこの空間が、あの日の一瞬で変わってしまったのだ。

消えてしまった声が私に聞こえてきたのは何か意味があるのかもしれない。生きていたら、私と同世代の子供達は、私に何を伝えたかったのか、私に何を託したかったのか、私には本当のことは分からない。ふと空を見上げると、沢山のトンボが飛び交っていた。子供達がまた小学校に戻ってきたみたいに見えた。

私は感じたことを周りに伝えることもボランティア活動の一環だと思っている。消えてしまった声、でも本当は大声で叫んでいるだろう声を私達が受け取ることが出来たのだとすれば、その「声なき声」を自分の声で届けることも許されるのではないだろうか。高校生の私にはとても重いものだが、投げ出さたくはない。高2の夏に受け取ったことは、私のやる気増強剤に変えて、これからも頑張っていこう。私の周りに少しずつ伝えることから始めていく。